

『二つの天孫降臨は連動していた』

たかみやしんじ

序章 「古事記」と「日本書紀」

戦後70年、今、古代史に造詣の深い多くの研究者や歴史家が、日本誕生の真実に迫ろうとしている。又、多くの日本国民がそのことに興味を膨らませているようである。それは太平洋戦争敗戦後、明治以降の天皇を中心とした統治体制から三権分立による統治体制になり経済発展も遂げてきた日本国であるが、置いてきてしまった日本誕生の真実を知りたくなったということであろうか。時あたかも、東アジアにおける中国の台頭、北朝鮮の専制、韓国的发展という状況は日本列島をとりまく古来の図式が再現されているかのようである。

日本誕生の謎を解く鍵が神話の時代と歴史の時代を繋ぐ「古事記」と「日本書紀」とされている。両書とも編纂は天武天皇が指示したとされているが、何故この二書が並び編纂されたかなど謎も多い。本章では、序としてそれらについて考察してみたい。

紀元663年、倭の救済軍と百済の拠点「周留城」に新羅・唐の連合軍が陸海から殺到していた。同8月、倭の水軍は唐の水軍と白村江で対峙、倭水軍は唐水軍に正面突破を敢行するも及ばず大敗してしまうのであった。世にいう「白村江の戦い」である。これを指揮したのが、中大兄皇子（後の天智天皇）であった。この敗戦を機に大和朝廷は更なる政治体制強化と共に、唐・新羅の侵攻に備えた国土防備の強化を迫られることになる。幸い、唐と新羅は高句麗を滅ぼした後朝鮮半島の支配を巡って対立が始まり、670年には唐と新羅との戦闘が始まる。天智天皇が恐れていた唐・新羅連合軍の日本侵攻の危機は遠のいたのであった。

紀元671年、古代最大の乱といわれる「壬申の乱」が勃発する。これに勝利した大海人皇子は、673年天武天皇として即位する。この天武天皇が指示して編纂されたのが「古事記」と「日本書紀」といわれているのである。681年、親王・臣下に命じて「帝紀及び上古諸事」編纂の詔勅を出したとされる。後に完成する「日本書紀」の編纂開始である。又、稗田阿礼に皇帝日継と先代旧辞を詠み習わせたとされる。これが、後に「古事記」となるのである。これらは日本最古の歴史書とされるのであるが、何故に二書を並行させたかについては定説がないようである。何故であったのか。

いずれにしろ、二書共に天武天皇の時代には完成をみず、「古事記」は712年完成、

白村江の敗戦からは50年後、「日本書紀」は720年完成で60年後のことであった。何故ここで「白村江の戦い」をクローズアップさせるかということ、それは天武天皇をして、海外との戦争に敗戦したことへの対応策が国内政策の要諦として現われているのではないかと考えられるからである。一つは「皇親政治」といわれる、豪族たちを大臣に任命せず、皇子たち中心に政治を運営する体制を作り、権力集中を図ることにより強固な政権を志向した。又、宗教改革においては天照大神を祖とする天皇家と、各地の神をその体系の中に取り込む中で、各地で祭られていた神社や祭祀は保護と引き換えに国家管理に服せしめられた。更には、伊勢神宮を重視し、これを日本最高の神社とする道筋をつけたのが天武天皇とされるのである。

こうして、天武天皇は物理的人的には皇親政治により、精神的には宗教改革により、天皇による専制体制を確立したのであった。そして、「古事記」「日本書紀」の編纂は専制体制の確立・維持に必須の要件として機能せしめようとしたのではないかと考えられるのである。まずは「日本書紀」であるが、これは中国王朝の歴史書に習い、そのようなものの確立が国威発揚にとって不可欠と考えたのではなかろうか。これだけでも十分であったのであろうが、更に天皇は「古事記」の編纂をも指示する。これには特別の意味があったろう。こちらは宗教改革に大きく関係するのではないかと推量する。すでに記述のとおり、“各地で祀られていた神社や祭祀は保護と引き換えに国家管理に服し古代の国家神道が形成された”のである。

各地豪族の調査、伝承の調査、神社や祭祀の調査など詳細に行われたことであろう。それらの中から、過去から現在までの各地豪族の姿・有様は相当の精度で明らかにされてしまったのではないかと推察する。

持統天皇の治世（690年～697年）、信濃国諏訪に勅使派遣があった。

伊藤麟太郎氏はその著「新年内神事次第旧記釈義」において、“須波神については持統紀の奉幣の目的（須波潰し）は明らかであるが、交渉の結果、本殿では奉幣させず神長邸の特設場で奉幣せしめた。”と記述されているという。天武天皇時に諏訪衆は宗教改革に恭順しなかった。これを継承していた持統天皇がその対応を督促すべく勅使を派遣した記事と考えられるのである。このように、各地豪族・各地神社は隈なく調べ上げられ、国家管理に体系化されていったのであろう。

各地神社の国家管理への体系化というのは、即ち又、地方豪族から各地神社の祭神と祭祀権を奪うことでもあった。それまで、神社祭祀を執り行う中で衆を統率していた豪族であるが、神社と祭祀権を奪われると衆の統率のためには武力の誇示しか道がなくなる。皮肉なことに、このことが後の豪族軍事化への進展を促進してしまったのであろう。貴族社会から武家社会に変わっていくことを歴史は物語っているのである。

さて、こうして国家権威発揚と天皇家による専制政治を支えるべく編纂が開始された「古事記」と「日本書紀」であったが、完成は長期化する。「古事記」が完成されたとされるのが712年、元明天皇（女帝）時であり、「日本書紀」が完成したとされるのが720年、元正天皇（女帝）時であり、共に藤原氏が朝廷内で権力を掌握していたとされる頃であった。かくして、記紀は親百済系とされる藤原氏の意向に沿ったものに改竄されていくのである。

改竄の最大のものは、百済系にとって都合の悪い出雲や日向のことを神代にして神話の世界に追いやってしまったことだろう。この人代への復元は日本誕生の真実に迫る上では必須のことであろう。後段にてその幾つかに触れてみたい。

第一章 降りてきた神々

第一節 天照大神の誕生

中国の史書「宋史・外國伝・日本國」の条に、“雍熙（ようげん）元年、日本國の僧裔然（ちようねん）、その徒5、6人と海に浮かんで至り、銅器十事並びに本國職員令、王年代紀各一卷を献ず。”とある。宋史は中国の正史の一つで、1345年頃完成した宋代の歴史を記録した書で、雍熙元年は984年のこととされる。

又、宋史は言う。“倭国は本の倭奴國なり。自らその國日出ずる所に近きを以って、故に日本を以って名となす。”

984年というと、第64代円融天皇の時世である。「古事記」完成からは270年も後の時代である。この時期に日本の僧が日本の王年代紀を中国に持ち込んだ。そして、“國王は王をもって姓となし、伝襲して（今）王に至るに64世”と天皇制を説明しつつ、それ以前の古王朝（二十三世）をも伝えるのである。そして、古王朝において第十七代イザナギ、第十八代スサノオ、第十九代天照大神を伝えるのである。

「古事記」では、イザナギ・イザナミが国生みをする、そして神々を生む。イザナミが火の神カグツチを生んだ時陰部に火傷を負ってやがて死んでしまう。そして、イザナミの亡骸は比婆山に葬られるのである。イザナミを忘れられないイザナギは、黄泉の国からイザナミを連れ戻そうとする。しかし、イザナギがみたのは腐敗した恐ろしい姿だった。黄泉の国から地上に戻ったイザナギは、日向の阿波岐原で禊を行う。脱ぎ捨てた衣服などから神々が生まれる。そして、最後に顔を洗うと左目からアマテラス、右目からツキヨミ、鼻からスサノオが生まれるのであった。

イザナギ・イザナミはそもそもどこに住んでいたのだろうか。それは、イザナギが禊を行った日向と考えたい。では、何故にイザナミは比婆山（出雲）に葬られるのか。火

の神カグツチを生むとは当時製鉄が盛んであった出雲に人質にとられたことを意味するのではなかろうか。山下重良氏が Web サイトで「日本人の先祖と建国黎明期に活躍した人々」を発表されている。山下氏によれば、その頃出雲のスサノオが九州に進出してきていたというのである。北九州をまとめた後、スサノオは宇佐・日向と進んできたのである。そして本稿では、スサノオは日向を安堵する代わりにイザナミを人質にしまったのではないかと推論する。

イザナミを忘れられないイザナギは、イザナミを取り戻しに行くが、散々な目にあい敗れてしまう。こうして、スサノオは日向国を手中に収めるのである。この時イザナギとイザナミには向津姫という姫がいた。スサノオはこの姫と結婚するのである。後の天照大神である。

このように検討してみると、十七代イザナギと十八代スサノオが少し見えてくる。この後のスサノオについて、「古事記」は乱暴狼藉のかぎりを表現する。そして、天照大神と誓約を交わし、宗像三女神を生むが乱暴は収まらず、遂に天照大神は天岩屋に隠れてしまうのである。このスサノオと天照大神の誓約が前述の向津姫との結婚を意味しているのであろう。では、次の天照大神が天岩屋に隠れてしまったことは何を意味するのだろうか。物理的に世の中が暗くなることから、火山灰説、日食説、冬至説などが著わされるも、今一つ本質に迫らない。これは、隠れる方より出てくる方を重視したほうが理解しやすいのではないだろうか。即ち、スサノオが向津姫と婚姻した時好感をもって迎えられなかった。というよりも、言わば強引に娶った。そこで、スサノオは向津姫を幽閉するという暴挙にでるのであった。宇佐の安心院町（あじむまち）とみられる。これを「古事記」では天岩屋に隠れると描く。そして、スサノオの没後に晴れて十九代大王（オオキミ）に就任するのである。そのように考えると、イザナギからこの天照大神の就任まで、そしてそれ以降二十三代までの王年代紀は日向国に主体があったと考えて良さようである。

では十六代以前の王年代紀はどうなっていたのであろうか。前述の山下氏によれば、スサノオは出雲を建国した後、越、長門、筑前、豊前にも遠征し「和国」を連合したという。連合といってもこの頃の共同体同士が話し合いで纏まるはずがなく、武力による制圧であったと考えたほうがいいたろう。筑前界隈に勢力を張っていた奴国がスサノオに武力で制圧される。そして、スサノオはここに拠点を構えることにする。即ち、王に代わる傀儡政権の設置である。ここに何代か続いた奴国王の後にスサノオ系傀儡政権による王統譜が刻まれることになる。

中田力氏がその著「日本古代史を科学する」において、人の染色体の研究、運び込まれた稲の遺伝子の研究などから、越の勾踐に滅ぼされた姫姓の呉の王族・貴族がその

民と共に海に逃れ九州にたどり着き、「奴国」を興したものと推論されている。

その後の「奴国」は、既述のとおりやがてスサノオにより連合されてしまうのである。そして、「奴国」はじめ界隈の国々は共に北九州の各地物部氏の源流となるのではなかろうか。神武東征に功ありとのことで後に物部氏の称号が与えられることになる。以上のように北九州に上陸して稲作や諸文化を伝えて「奴国」など国々を築く一方、朝鮮海峡を挟んで交易に活躍したグループがいた。それが宗像海神族と考えたい。こちらでも神武東征にあたっては、船団を組むという重要な役割を担ったのである。

しかしながら、序章にて記述のとおり、記紀編纂者にとって百済系からみて都合の悪い新羅系出雲が王統譜に名を刻むことなどありえないことであった。そこで、傀儡政権の王やスサノオが登場する王統譜は記述できない。勢い、神代のこととして神話の世界に追いやってしまったという風に考えられるのである。

第二節 月読命は誰か

秦始皇帝の密名を帯びて数千人規模で日本に渡来してきた、所謂 徐福一行がある。彼らの主たる逗留地は「宮下文書」に記載があるという。しかしながら、各地の伝承はそれらに限らず幾多の上陸を伝えているのである。「古事記」にみえる「高志国沼河比売」（越の奴奈川姫）、越の国を治めた奴奈川族の首長で翡翠を用いシャーマン的な力を持つ祭祀女王と考えられている。新潟県糸魚川市姫川は古くから翡翠の産地として著名である。奴奈川姫は絶世の美女といわれ、出雲から大国主命が求婚に訪れ結ばれている。徐福一行は稲作他様々な先進文化を運んでくるが、その道教の影響も大きなものがあっただろう。徐福一行の北上組が高志国に融合したとすれば、祭祀女王奴奈川姫の誕生も可能性を秘めている。事実、少し北の秋田県男鹿市や青森県小泊市には徐福渡来の伝承があるとされているのである。

長野県小県郡と諏訪郡の境に和田峠がある。ここは、古来黒曜石の産地として名高い。縄文時代においては矢じりに使われるなどして、日本のいろいろな地方に流通していたと言われる。流通していたからには流通の道があった。黒曜石の道である。高志国に融合した徐福の集団の一部がこの黒曜石の道を辿り、内陸に進んだ可能性がある。元内閣総理大臣の羽田孜氏は、その祖先が秦始皇帝と徐福であると言われている。孜氏の祖父は羽田貞義氏で、小県郡和田村（現長和町）に家がある。そして、祖先を窺わせるように、「秦陽館」と書かれた大きな額が掲げられている。その昔、徐福一派が和田村に辿り着いたことを物語っているようである。

徐福一行北上組は、能登半島を巡って北上する。そして、徐々に越国奴奈川族と融合していったのであろう。この奴奈川族の首長こそ月読命ではないかと考えるのである。左目から天照大神が生まれ、右目から月読命が生まれているように、この二神は対の関

係にある。即ち、日向に土着した徐福一行の末裔が天照大神であり、越国に土着した徐福一行の末裔が月読命なのである。スサノオが退治したヤマタノオロチからでてきた「剣」、天照大神が使っていた「鏡」。そして、奴奈川族の拠点糸魚川市を流れる姫川上流から産出されていた「翡翠」、これが三種の神器の「勾玉」のことではなかろうか。このように考えることで、初代神武天皇に続く第二代綏靖天皇（神淳名川耳命）の登場とその出自が理解されるものと思われる。

糸魚川市能生「白山神社」。明治時代に式内社・奴奈川神社論社とされ、祭神はイザナギ命、奴奈川姫命、大己貴命である。既に記述のとおり、イザナギ命は徐福渡来一行の主力組の末裔であり、その娘が天照大神である。イザナギ命を祀っているということは、奴奈川族と徐福一行との強い関係を示すものと考えてもいいのではなかろうか。

第三節 戸隠伝説

戸隠神社。上信越高原国立公園の戸隠高原にあり、古くは戸隠山をご神体とする。九頭龍社、奥社、中社、宝光社、火之御子社の五社で構成されている壮大なスケールの境内である。奥社入り口から遊歩道（参道）があり、隋神門を経由して約4Km登ると奥社、九頭龍社に辿り着く。それらの下方に中社、宝光社、火之御子社が配されている。九頭龍社は、祭神が九頭龍大神で、天手力雄命が奉祭される前から地主神として祀られていたという。古来、水の神、雨乞いの神、虫歯の神、縁結びの神として尊信されていたという。奥社は祭神が天手力雄命。「古事記」にある、天照大神が天岩屋に隠れた時、神力をもって天の岩戸を開き、天照大神を天岩屋から導き出したと言われる。そして、天の岩戸を放り投げて地上に落ちた所が戸隠山になったと言われているのである。

さて、戸隠神社の起源であるが、上記のとおり九頭龍社が戸隠山を山の神として祀っていたことがその起源ということであろう。但し、戸隠山と名乗るのは奥社創建以降のことと考えられる。そして、山の神は水の神でもあった。第二節で記述した「白山神社」。境内に「蛇の口の水」という湧水がある。これは戸隠山からくる湧水とされ、伝承では戸隠山が龍の頭で、「蛇の口の水」は龍の尾と言われているという。奴奈川族の拠点は糸魚川周辺であった。従って、古代に戸隠山に九頭龍社を祀り、山の神・水の神として崇めていたのは奴奈川族ではないだろうか。

次に奥社であるが、天手力雄命が天の岩戸を開いたという神話は「古事記」に記述されている訳だから、「古事記」が編纂された712年以降の創建ということになる。果たしてそのようなことだったのであろうか。若しそうだとすると、史実とはかけ離れた神話の記述だけをもとに神社を創建したということになってしまうのである。しかも、その神話を更に上塗りするように、岩戸が九州から投げ飛ばされてくるのであるから、

理解するのが相当困難である。「古事記」がそのような記述をし、戸隠山の伝承が伝えたいのは奴奈川族が天孫系であるということではないだろうか。本稿では、奥社は天の岩屋に隠れていた天照大神（向津姫）が岩屋から出てきて、第十九代天照大神尊に就任したことを祝賀して、奴奈川族が創建したものと推論する。徐福の率いた一方の集団の末裔が王統譜に名を連ねたのであるから大いに祝福したに違いない。従って、奥社創建時は天照大神を祀っていたものと思われる。しかしながら、後の天武天皇の宗教改革において天照大神は皇祖神の扱いになるので、そのまま奥社の祭神としておくことは容認されなかった。そこで考え出されたのが、上記のような説話を作り、天手力雄命を祭神とすることだったのである。

第四節 オオクニヌシ物語

「古事記」の描く大国主命は、スサノオの六代孫のオホアナムジが八十神の迫害を退け、スサノオの試練を乗り越えて、スサノオの娘スセリヒメと結ばれる。そして、大国主と名乗って国造りに励むことになる。この件、記紀編纂者から読者への挑戦であろうか。この難問のからくりを解いてみよ・・・と。

次の章で詳論するが、オホアナムジはスサノオの末子スセリヒメに入り婿したのであった。だから六代孫ではないのである。従って、オホアナムジを名乗って活躍したのはオオクニヌシとしなくてはならないだろう。では、何故オホアナムジを登場させたのだろうか。それは、オオクニヌシをスサノオの末裔として描きたかった記紀の編纂方針によるものであろう。オオクニヌシをスサノオの末裔、即ち新羅系とすることによって、出雲を反百濟系として位置づけることができる。しかしながら、このことは逆にいえば、オオクニヌシが出雲といえども、スサノオ系ではないと明白にしているのである。

中田力氏がその著「日本古代史を科学する」において推論されている。BC 473年に呉を滅ぼした越（勾踐）は、現在の江蘇省から浙江省にいたる広大な地域を治めることとなったが、その栄華も長くは続かず、BC 334年楚によって滅ぼされる。越の王族貴族は南に逃れ、現在の福建省に閩越を建てた。楚によって滅ぼされた時の越は、もともと呉と越があった地域を支配していた。そこにはもともとの呉の民が越の臣下として越に留まった人々も多かった。しかし、越の滅亡である。異文化度の高い楚の支配下に下るのを嫌ったもともとの呉の下級貴族などが北上して倭国に逃れたことは十分考えられることだとされている。

越の文化で育ったかつての呉の難民は、北上して倭国北九州を目指す。しかし、そこには既に頭角を現しつつあった、そもそもの呉の民がいて「奴国」を興していた。し

かも自分達より身分の高い王族貴族の末裔である。結局、第二の呉の難民は更に奥地に向かって日本海を進まざるを得なかった。そこは出雲の地である。そして、やがて「狗奴国」を興すこととなる。では、何故「奴国」は同郷の難民を受け入れなかったのだろうか。それは越に滅ぼされた時に袂を分けたことが重大だったのではなからうか。越から逃れた第一の呉の難民と越に下った人々である。そこには許されざる因縁があったのであろう。そして、そのことが、再び抗争の火種となっていくのである。大国主の国造りの甲斐あって、「狗奴国」は強大化する。そして、中国への朝貢を窺うまでになり、「奴国」を脅かすようになっていくのである。遂には、「奴国」にとって替わろうと戦いを挑んでいく。所謂、「倭国大乱」が起こるのであった。

山下重良氏の解析によれば、スサノオが没した後の、その御陵は元出雲国一ノ宮「熊野大社」の元宮の地とみられる。「熊野大社」は島根県松江市八雲町にある。スサノオ並びに一族は「熊野大社」界隈を本拠としていたとみられる。出雲国造は意宇郡に根を張った一族と言われており、国庁も意宇に置かれていた。意宇川上流に「熊野大社」がある。このようにみてくると、一族の朝鮮からの渡来地、スサノオの活躍の本拠地は松江市界隈であったものと考えられる。

これに対し、荒神谷遺跡（島根県斐川町）、出雲大社（島根県出雲市）はスサノオ以外の豪族の発展があったのではないかと思われる。それは青銅器を祭祀に用いた人々であった。特に銅鐸の使用に特徴があり、これが越の文化を帯同した第二の呉の難民であろう。江ノ川一帯に土着していた一族が発展してきたものと思われる。

前述の中田力氏は、出雲から出土した銅鐸は日本固有のデザインと考えられていたが、その原形と思われる青磁の鐸が江蘇省無錫市にある貴族の墓から出土した、又、浙江省紹興市で発見された勾踐（こうせん）の父、越王允常（いんじょう）の墓と思われる印山越王陵の合掌形の木槨墓は、殆ど大社造りを地中に埋めたような姿をしているのだと著わされた。これらのことが示すのは、越の文化を帯同した人々が出雲に渡来したということである。しかしながら、前記のように古来の越の人々は楚に追われて南へ逃げた。となれば、越の文化に染まった元々の呉の人々が渡来したとしか考えられないのではなからうか。

以上のことから、大国主命の出自は第二の呉の難民の末裔と考えられる。従って、新羅系とされるスサノオとは出自が異なるのである。では記紀編纂者たちは何故オオクニヌシをスサノオの末裔としたかったのか。それは、その頃大和において出雲系の力を弱体化させんとする動きが働いたのでないかと考えられる。天武天皇の宗教改革は、各地豪族の来歴や神社祭祀を調べ上げることに主眼があった。そして、弱点を浮かび上がらせ、強みを弱体化させる手を打ったのである。オオクニヌシ出雲もスサノオ出雲と同一視することによって、天孫系ではない、即ち傍流であることを喧伝したかったのでは

ないかと考えられるのである。

第五節 建御名方神の汚名返上

諏訪大社。長野県諏訪湖周辺四ヶ所にある神社である。延喜式内社にして、信濃国一ノ宮。近代社格制度においては官幣大社に列せられ、現在は神社本庁の別表神社である。又、全国に約6,500社あると言われる諏訪神社の総本社である。この諏訪大社の主祭神が建御名方神である。「古事記」の出雲国譲りの段では、オオクニヌシの御子神として登場、国譲りに反対する。そして、タテミカツチとの力比べに敗れ諏訪の地に逃れ、この地を出ないなどの条件を付され許されるのであった。この結果、オオクニヌシは出雲を高天原に譲ることを決意するのである。

古来この説話は余り信用されていなかったものと思われる。戦に敗れて山奥に隠れた神を全国の神社が勧請することには大きな疑問符がつく。又、先に記述した持統天皇の勅使派遣の意味も不明となってしまうのである。力を持っているからこそ、勅使を派遣してまでこれを屈服させなければならなかった。逃亡して蟄居した神であればそのような必要がないのである。後段にて詳述するが、史実は神武の東遷のための環境造りの一環の戦いであったのである。建御名方神の役割は、山陰から越、信濃の平定、そして諏訪を律することだった。諏訪を律することの意味は古来黒曜石の流通していた道を制することだった。「黒曜石の道」を制することが界隈を制することと同義と考えられたのであろう。このようにして、建御名方神は諏訪の地を律した。しかしながら、諏訪には縄文時代から信じられていた地場神がいて、統率する神長もいた。これらとの最後の戦いが繰り広げられたのである。そして、建御名方神は下社（春宮）にスサノオを掲げて鎮座し、上社（前宮）は地場神を祀り鎮座するという二社体制で決着する。更には、建御名方神は、神長の娘八坂刀売神を妃として娶るのである。これが諏訪神社の最初の起源である。

では、持統天皇の勅使派遣にも恭順しなかった諏訪神社はその後どうなったのであろうか。大宝律令が発布されたのが701年。この時は東山道、信濃国、諏訪郡であった。この後、721年に信濃国から諏訪国が分国されるのである。領域は現在の諏訪郡から南の木曾方面とされるが詳細不詳である。国府の場所も不詳である。信濃国と同様美濃按察使の下に置かれたというから、発足時はその直轄であったかもしれない。諏訪国分国の理由は、諏訪地方の国家管理を強化せんがため、諏訪神社を国家管理に服せしめようとしたためと思われる。さしもの諏訪衆も、国府を設けられて束縛されるのは避けたかった。ここに、建御名方神と八坂刀売神を主祭神とする現在の諏訪神社が出来上がったのである。延喜式神名帳には、「南方刀美神社」（みなかたとみのやしろ）と記さ

れる。天照大神を筆頭とする国家神道体制では、地主神は認められなかった。ましてや、スサノオを祀るなどもっての外だったのである。そして、恭順した諏訪をみて十年という短期間で、731年にはもとの信濃国に戻されているのである。

伊勢神宮には、20年に一度内宮や外宮の正殿などを造り替えて神座を遷す「式年遷宮」というものがある。界隈の摂末社も同時に行われるのである。伊勢神宮の「式年遷宮」が行われるようになったのは天武天皇時とされるが、その意味などは諸説あって中々難しいが、ここでは一先ずは老朽化のための対策としておこう。例えば信濃国穂高神社でも20年に一度「大遷宮祭」が行われており、そうしたことが天武天皇の宗教改革で全国に命令されていたのであろう。問題は、諏訪大社で行われている「諏訪大社式年造営御柱大祭」である。こちらは、6年に一度 縦の巨木を奥山から切り出し、諏訪大社四社殿の四方に建てて神木とする。同時に宝殿の建て替えと宝殿内の神器の遷座も行われる。界隈の摂末社においても御柱祭は行われる。意味合いは式年遷宮と同じことと思われる。即ち、当初は遷宮が行われていたのであろう。それが時代と共に変化して、現在のような形態になってきたものと考えられる。しかしながら、大きく異なるのは6年に一度という点である。この式年遷宮には莫大なお金がかかる。だから、6年に一度という過酷な負担を課して、諏訪衆の強大化の防止を図ったのである。そもそも、20年に一度の遷宮とはいえ、地方にとっては大きな負担であった。こちらも、伊勢神宮を見本にして、地方豪族の台頭を防止し、中央朝廷の専制政治を徹底しようとした政策の一環であったのであろう。特に建御名方神はスサノオ系であり、その強大化には大いに注意したということだろう。

第二章 二つの天孫降臨

第一節 天孫降臨の真実

「古事記」。高天原の神による地上世界の支配が確定すると、いよいよ統治者を派遣することになるのである。そこで任命されたのが、オシオミミの子ニギであった。フルネームは、“天邇岐志・国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命”である。あめにきし・くににきしとは天にも地にも親和的であることを示すとされる。天津日高は高天原と関わる神であること、日子は日神である天照大神の嫡流の男子を示す。更には、番能（稲穂）がにぎにぎしく成熟するというのである。天孫降臨の使者として、これでもかという位に修飾語で飾られる。しかしながら、史実は一言でいうと天照大神つまりは、向津姫の孫である。天武天皇は天照大神を皇祖神とする神社体系を構築した。その意向を汲んだ記紀であるからそのような大袈裟な表現となったのであろう。

さて、天孫降臨はオオクニヌシの出雲の国譲りが終わって後行われるのである。では、何故そのように記述されることになったのか。史実はどうであったのか。ここで少し検討してみたい。結論を先に言うと、この段階ではオオクニヌシは未だ登場しないのである。史実においてこの段階で登場するのは、オオナムジであった。先に参照した山下重良氏によれば、スサノオ亡き後日向を統治したのは末子スセリヒメの婿養子オオナムジであった。そして、スサノオと向津姫の娘タギリヒメを娶り、事代主神が生まれる。一方、出雲の正妻スセリヒメとの子として建御名方神が生まれるのである。

又、日向国一ノ宮は“都農神社”で、主祭神はオオナムジである。面白いことに日向国二ノ宮論社が“都萬神社”とされていて、主祭神がコノハナサクヤヒメ、両社は政治的・宗教的に対立していたと伝承されるのである。オオナムジは「古事記」においても記されるようにスサノオ系であり、やがてオオクニヌシに繋がっていくのである。そして、国譲りが行われる。コノハナサクヤヒメは「古事記」ではニニギが恋して後裔を残し、神武天皇に繋がる姫である。これは一体どうなってしまったのか。時代と登場人物が錯綜して訳が解らない。

ここで、「古事記」の編纂者たちの構想した大きなトリックを見破らなければならないのである。即ち、この段階で(天孫降臨の前に)出雲の国譲りなどなかったのである。タケミカツチの力の前に事代主と建御名方が屈したというようなこともなかったのである。史実は事代主と建御名方が協力して、神武の東遷の環境を作ったということであろう。タケミカツチに敗れた建御名方の諏訪への逃亡劇は、史実では山陰から越、信濃の平定、そして諏訪を律するというのが建御名方の役割だったのである。一方、事代主も瀬戸内、畿内、東海辺りの平定に向かう。それらは力を持ってきた向津姫の指示だと推論されるのである。「日本書紀」には、建御雷神と経津主神が岐神(ふなとのかみ)の案内で諸国の帰順を求めて巡行した時、大物主神と事代主神が同意したとある。どうも出雲の国譲りの段はここら辺のことを描いているのであろう。しかしながら、これらのことは実際には国譲りではなく国盗りであったのではなかろうか。

このように考えると、大仰な天孫降臨ということも俄かに妖しくなってくる。史実ではオオナムジが出雲からやって来て、向津姫の娘タギリヒメを娶るのであった。この姫は、スサノオと天照大神との誓約で生まれた宗像三女神の一人である。しかしながら、これでは天照大神を皇祖神とする神社体系が作れない。そこでニニギには所謂三種の神器を持たせ、ありとあらゆる形容詞で名乗り、大仰に天孫降臨させるのである。そして、宗像三女神には宗像海神族の租神という役割を与え、スサノオとの繋がりを断つのである。

さて、「古事記」。一夜の契りで懐妊したコノハナサクヤヒメを、“それは国つ神の子

であろう。”とニニギがなじる。ヒメは身の潔白を証明するために入り口を塞いだ産屋に入り、火を放つ。天つ神の子なら火の中でも生まれるはずという言葉どおり、三子が誕生する。これが、ホデリ、ホスセリ、ホヲリの三兄弟である。この三兄弟、火の中から生まれたという想定になっており、このことはある示唆を含んでいるのである。即ち、末弟ホヲリは後に山幸彦と称されるが霊山霧島山の暗号であろう。兄ホデリは海幸彦と呼ばれるが桜島の暗号。そして、ホスセリは記されることが少ないが投馬国の由布岳の暗号であろう。いずれも地域を代表する活火山である。これらのことは、中国から渡来した徐福一行が先ずは日向に土着する。そして、大隈・薩摩に進出したこと、豊後に進出したことを示しているのである。江戸時代、本居宣長は「都萬神社」がある“妻つま”を投馬国に比定したと言われているが、本稿の推論は逆で”つま“から出て行って開拓したのが投馬国だったのである。そして、投馬国の人々はやがて丹波国にも移りこの国を拓くことになるのである。豊後国日出町（ひじまち）真那井と丹後国比治・真名井の地名の類似がこのことを示しているとみられる。

丹後国の一の宮籠神社。主祭神は彦火明命とされている。後段にて記述するが、この彦火明命はスサノオの御子大歳尊とみられる。スサノオの宇佐・日向連合時に活躍し、豊国大魂と崇められたという。この縁から主祭神に祀られているのであろう。

この後、「古事記」は山幸と海幸の確執を描く。そして、山幸はワタツミの宮に逗留して、知恵を授けられ海幸との確執に勝利する。海幸は隼人の租となる。この山幸と海幸の確執は何を意味しているのだろうか。共に秦始皇帝の命を帯びて不老不死の仙薬を探しにきたはずである。そして、日向に上陸し片や大隈・薩摩に進出した間柄である。「古事記」では双方の水田の出来、不出来が不仲の要因の一つのように描く。当時このことが最重要なことだったろう。このことがやがて主導権争いに発展していつてしまうのである。そして、隼人の租となった一党は肥後と結び熊襲となって天皇家とは相容れない関係となってゆくのである。一方のホスセリは豊後国に進出し投馬国を開いた一派の後継なのであろう。

再び、「古事記」。トヨタマビメと結婚したホヲリはワタツミの宮から戻るのであるが、ある日身重のトヨタマビメが出産のため訪ねてくる。ホヲリが産屋を覗くと一匹の鰐がのた打ち回っていた。異郷の者は元の姿で出産するというのだ。見られたことを恥じたトヨタマビメは生んだ御子ウガヤフキアヘズを残して海に帰っていく。そして、代わりに妹のタマヨリビメを送り、ウガヤフキアヘズを養育させたのだった。その後、成長したウガヤフキアヘズは育ててくれたタマヨリビメを娶り、四人の子を儲ける。その末子ワカミケヌの別名がカムヤマトイワレヒコ、後の神武天皇である。

この件（くだり）の史実の復元は中々に複雑で難しい。トヨタマビメは鰐と著わされ

るのであるから、ワタツミの宮に関係するとはいえ、どうも王族系ではないらしい。ここは、ワタツミ三神から派生した宗像海神族の姫と言いたいのではなかろうか。姉妹を送り込むについては、理解を超えるがコノハナサクヤヒメとイワナガヒメの例もあり、そのまま受け止めておく。タマヨリビメは姉とどの位年齢差があったのだろうかなど興味も湧くが、それも流して次に進もう。

結局ここで明らかにされたのは、チョウネンの王年代紀で著わされた、二十一代 天彦尊がニニギ、二十二代 炎尊がホヲリ、二十三代 彦瀲尊がウガヤフキアヘズと一致することである。そして、ウガヤフキアヘズの第四子が神武天皇となるのである。ここは出典が同じようなものであるから一致して何の不思議もないのである。

しかしながら、鰐、即ち宗像海神族に意味がないかということそうでもないだろう。「古事記」ではカムヤマトイワレヒコ東征の時、“筑紫の岡田宮に一年座しき”、「日本書紀」には“筑紫国の岡水門に至りたまふ”とあり、軍船を集めた場所とされているのである。福岡県東筑高校の校歌では、遠賀の水門＝おかのみなと と歌うらしい。遠賀川河口、遠賀郡芦屋町に鎮座する「神武天皇社」は岡田宮跡とされているのである。これらを総合すると、どうやらカムヤマトイワレヒコは東征時、宗像海神族の船団と共に筑紫を出発した模様である・・・。

第二節 もう一つの天孫降臨

所謂「天孫降臨」は、天照大神の命によりニニギが三種の神器（八咫鏡、八尺勾玉、草薙剣）を授けられて、葦原中つ国を治めるため高天原から日向国の高千穂峰に天降ることを指すのである。本稿では第一節においてこの「天孫降臨」を論じた。そして、記紀の描く世界から史実を覗いてみた。ここでは、もう一つの「天孫降臨」について論じてみたい。もう一つの「天孫降臨」は、記紀カムヤマトイワレヒコ東征の段において記述がある。

カムヤマトイワレヒコの東征の一行は、日向を出発し、宇佐で歓待を受けた後筑紫岡田宮で一年逗留する。そして、軍備を整えて安芸国に七年、吉備国に八年かけてこれを平定し、河内国に向かう。しかしながら、ここで大和豪族ナガスネヒコの抵抗にあい、紀国に迂回しそちらから大和に入ろうとするのであった。高天原からは案内人としてヤタガラスが派遣される。イワレヒコ一行が戦いに明け暮れていたある日、ニギハヤヒという神が訪ねてくる。そして、天からやってきた印として持っていた宝物を差し出し、イワレヒコに従うことになる。ニギハヤヒは実はこの地の土豪ナガスネヒコの妹トミヤビメと結婚していてウマシマジが生まれていた。ウマシマジは物部氏、穂積氏などの先祖とされているのである。

「先代旧事本紀」によれば、ニギハヤヒは十種の神宝を持ち、三十二神の供を従えて天

磐船に乗り、高天原から河内国に降り立つ。その後再び大空を翔け大和に移る。そして、大和の支配者ナガスネヒコの妹を妻とし、一族の長として当地を治めていた。後にイワレヒコがやってくると、服従を示さないナガスネヒコを殺害し、自らの支配地をイワレヒコに差し出すのだった。

そうこうして、イワレヒコ一行は大和に入り、橿原宮を建て初代神武天皇となるのである。このニギハヤヒの「天孫降臨」とイワレヒコへの服従の逸話、多くの示唆を含んでいることを予感させる。しかしながら、このままでは何のことかさっぱり分らないのである。一体どういうことだったのであろうか。又、このニギハヤヒの人物比定については、大きくは三説あるという。以降において各説を概覧する中で史実を探っていきたいと考えるものである。

イ) 天火明説

「先代旧事本紀」では、天押穗耳尊が高皇産靈尊の娘を妃として「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」を生んだ。天照大神の許しでこの子が天降ることになる。経緯はニギの降臨と同じで、この二人兄弟である。兄弟で片や日向に降臨して後継イワレヒコが東征して天下を治めることになる。片や、河内に降臨して下地を作りイワレヒコの東征を待つのである。さてこの話本当だろうか。日向のニギは既に論述したように、スサノオの娘婿オオナムジであった。これが正しいとすれば、河内のニギハヤヒはオオナムジの兄となる。オオナムジはスサノオの末子須世理姫に入り婿しているので、スサノオの子の誰かが河内のニギハヤヒということになる。既に度々参照している山下重良氏によれば、三男大歳尊はスサノオの遺言により大和に進出し、これを治めたというのだ。とすれば、この大歳尊こそニギハヤヒとして整合性がとれているのである。

大阪府交野市「磐船神社」。主祭神はニギハヤヒで“天の磐船”と呼ばれる舟形巨岩をご神体として鎮座している。界隈に勢力を張っていた肩野（かたの）物部氏一族の氏神といわれている。

ロ) オオクニヌシの子とする説

「播磨国風土記」に大汝命（大国主）と火明命（天火明命）の説話がある。

“大汝命の子である火明命は乱暴者であった。そのことを憂えた大汝命は置き去りにすることを考えた。因達神山まで来たところで、火明命に水を汲みに行かせ、その間に船を出して大汝命は逃げてしまった。置き去りにされたことがわかった火明命は怒り狂って波風を立たせ、大汝命の船を転覆させてしまった。船・波・船から落ちた積荷には因みに十四丘の名前が付けられた。”

大汝命はオオナムジのことでいいだろう。問題はオオナムジの子が火明命と記されていることである。オオナムジの子なら事代主が登場してこないとならないのであるが、敢えて火明命とした。ここは、イ) 説と同様大歳尊とするのが妥当であろう。大歳尊はス

サノオの命に基づき北九州を出て、瀬戸内海豪族を平定し、播磨国に逗留するのである。乱暴者の肩書きは豪族平定の過程を語るものであろう。十四丘の名前が付けられたのは播磨の平定と同地での逗留を意味しているのである。

ハ) スサノオの子とする説

諸説言われているようであるが、ここでは山下重良氏の大歳尊説に耳を傾けてみよう。大歳尊はスサノオの九州統一に活躍した後、筑紫に拠点を置き北九州を統治した。その後、讃岐の地に遷り瀬戸内海を治めながら河内・大和以東の統一準備を進めた。そして、播磨に遷り、摂津・河内の豪族と国家連合の交渉にあたった。スサノオの死後、父の見果てぬ夢を果たすべく大和統一を目指して東遷した。その時ニギハヤヒと改名した。一行は難波津から古代大和川をのぼり、生駒山を越える磐船越えで大和に入った。大和に入ったニギハヤヒは、鳥見の豪族ナガスネヒコの妹ミカシキヤヒメを娶り、戦わずしてナガスネヒコを配下に収めた。そして、三輪山麓を本拠にして本格的な大和の国造りが始まった。

ニギハヤヒが亡くなった時、末子の御歳姫（イスケヨリヒメ）は幼かったので義兄ウマシマジが政務をとるが、やがて御歳姫が成人すると、日向から狭野命を養子に迎える。イワレヒコと名乗り橿原宮で王位を継承して、初代神武天皇となるのである。

三説を総合すると、どうもニギハヤヒはスサノオの子大歳尊であり、大歳尊は北九州から出発し瀬戸内海を制覇しつつ畿内を目指し、やがて大和に入る。そして、当地にある程度の地盤を築いたものとみられる。この言わば、大歳尊の“東征”を「古事記」ではイワレヒコ（やがて神武）の“東征”として描いているのであろう。イワレヒコの婿入りは軍備を整えた“東征”というようなものではなかった。それでも、「古事記」の言うように日向を出発し、宇佐に立ち寄り、岡田宮で挨拶し順次瀬戸内海を上って行ったのであろう。しかしながら、すんなりと大和に入れた訳ではなかった。若干の抵抗勢力に阻まれ、紀伊方面から大和に入ることになる。「古事記」の現す神武東征とは、これらを合体させたものということであろう。

さて、これまで二つの天孫降臨を論じてきたが、置いてきてしまった神が一人いる。それは、天之忍穗耳命（オシオミミ）である。スサノオと天照大神の誓約によって、スサノオが天照大神の勾玉から五人の男神を生むが、その内の一人がオシオミミである。このオシオミミ、国譲りの段で最初の使者として派遣されるが、天の浮橋で地上を眺めた時、地上の神々の騒がしさを見て戻ってしまう。又、天孫降臨の段でも当初地上の支配者として降臨するはずであったが、息子のニニギを降臨させるよう申し出してしまうのである。何故このような神を挟み入れないといけなかったのか。オシオミミとは誰なのか。これらを解明しないでは本稿を閉じることができないのである。

このオシオミミ「古事記」では、正勝吾勝速日天忍穗耳命である。このような大仰な命名は何かの暗号と考える必要があろう。天照大神の長男として生まれ、高木神の娘との間にアメノホアカリとニニギをもうけるのであるが、既述のように両神とも史実と神話では異なっていた。ニニギはオオナムジであった。とすれば、オシオミミはオオナムジの父親ということになる。オオナムジは出雲からやってくるのであるから、天照大神の子ではない。ここは月読命（奴奈川族）の子がオシオミミと考えたらどうであろうか。そして、その子のオオナムジがスサノオの末子スセリヒメの婿養子に入るのである。スサノオの越国連合時の政略婚ではなかったか。「古事記」が描くオオナムジと八十神との確執は出雲と越との戦いを示すものと考えられる。又、オシオミミが天照大神の勾玉から生まれたと記述されるのも多分に示唆的である。

既に記述のとおり、ニニギは史実の人ではなかった。その父親とされるオシオミミの記紀の記述も上記により否定される。これらのことは記紀の狙いのもう一つに、スサノオを出来る限り神武天皇から遠ざけることがあった。だから、神武天皇は天照大神から五代の後の神に描かれる。一方で、実際の神武天皇の東遷を支えたと考えられるスサノオの婿オオナムジは六代孫として登場させるという念の入れようである。しかしながら、史実はどうもスサノオと向津姫の子である、熊野楠日尊（ウガヤフキアエズ）の子狭野命がイワレヒコでやがて東遷して神武天皇になると言われるのである。時の朝廷を差配していた百済系の豪族（藤原氏）にとっては、新羅系の皇統譜とすることはあり得なかった。さりとて、虚構の百済系を構築することも憚られた。そこでやむなく江南系をよしとしたのであろう。だから、江南系がよしではなく、新羅系駄目だったのである。そして、江南系の後に百済系を用意するという周到な戦略にでるのである。即ち、神功皇后と応神天皇が後に準備されているのである。

了

<参考文献>

- | | | |
|--|---------|---------|
| ・オールカラーでわかりやすい
古事記・日本書紀 | 多田 元監修 | 西東社 |
| ・ヤマト国家成立の秘密 | 澤田洋太郎著 | 新泉社 |
| ・日本古代史の謎を解く | 澤田洋太郎著 | 新泉社 |
| ・日本古代史を科学する | 中田 力著 | PHP 研究所 |
| ・日本人の先祖と建国黎明期に活躍した人々 | 山下重良著 | WEB サイト |
| ・宋史日本伝読み下し | 古代史癡祭 | WEB サイト |
| ・日本建国史の復元 | 崎元正教著 | WEB サイト |
| ・古事記・日本書紀・白村江の戦い・天孫降臨
天武天皇・持統天皇・天火明命他 | ウィキペディア | WEB サイト |